

## 日本最大規模の人形劇の祭典

8月4日から9日まで、長野県伊那谷の飯田市で人形劇フェスタ 2015 が開催された。1979年に「人形劇カーニバル」として始まり、第21回から市民中心の実行委員会主催「人形劇フェスタ」となって通算37回を数える。国内外のプロ・アマチュア約240劇団が参加し、440ステージの上演。会場は文化会館・人形劇場・美術博物館・公民館・小中学校・短大・保育園・市庁舎・商工会館・地区センター・神社・公園・市中心部の路上など、市全域100カ所以上に及ぶ。当初から地域分散方式、ワッペン(700円)で子どもから大人まで自由に何度でも観劇できる仕組みを導入し、さらにフェスタ実行委員会や劇団の企画による有料公演、企業等の寄付によるプレゼント公演、実行委員会主催の交流事業やワークショップ、パレード、地区それぞれの地域企画、周辺市町村への広域公演、8日には市の夏祭りも合流して熱気と賑わいに満ちた6日間であった。

昨年度実績では、観劇者数延べ4万6千人以上、ワッペン販売数1万3千枚以上、劇団員の参加1900人以上と、人口10万都市としては例をみない大きな人形劇の祭典である。運営を支えているのは87人のフェスタ実行委員会と文化会館人形劇のまちづくり係(事務局)、2000人以上のボランティアスタッフ(地区1700人、本部300人)である。スタッフには多くの中高生も登録している。「みる・演じる・ささえる わたしがつくる トライアングルステージ」というフェスタの基本理念にもとづき、市民、地域団体、事業所、商工会から小中高生、大学生まで、共に人形劇文化を育み、社会参加と交流の輪を広げる機会となっているのである。文字どおり、人形劇のまちづくりである。

## 広がる学校人形劇と地域のとりくみ

市内公立小中学校28校のうち23校、25の人形劇団がフェスタで上演をおこなう。黒田人形、今田人形など江戸期の伝統人形浄瑠璃保存会が長年指導している高稜中学校・竜峡中学校の伝統人形劇クラブもあり、人形劇文化の歴史が息づいている。高・短大、地域子ども劇団を合わせ、地元青少年劇団30以上、約530人がフェスタで上演し、さらに伊那谷文化芸術祭や福祉施設訪問など年間にわたる活動もおこなっている。

小中学校の支援として、文化会館と学校教育課の連携による「学校人形劇育成支援事業」が注目される。小学校では主に3・4年生の総合的学習の時間で人形劇にとりくむ。担当の教員に対して教育委員会が研修会をおこない、求めに応じてプロの劇人が指導者として公費で3回派遣される。人形や道具の製作費用も上限2万円の範囲で助成される。他市から異動してきた教員も劇人や地域の人々の支援によって、フェスタ上演を目標に子どもたちと共に人形劇にとりくむ土壌が形成されているのである。

地区ごとの自主企画も盛んである。地域の伝説をもとに人形劇を創作したり、遠隔地からバス・電車ツアーを仕立てて市街地の観劇にでかけたり、獅子舞保存会による上演と体験がおこなわれるなど、地域住民の思いをこめた企画が練られている。

15年間フェスタ実行委員長をつとめ、2013年に設立されたNPO法人いいた人形劇センター理事長となった高松和子さんは、かつては観る側であった子どもたちが、現在では演じ、ボランティアとして支える側にもなっていることが「飯田らしさ」となっているという。そして、「自ら、見たり、支えたりすること、そのこと自体がすでに創造活動であり、その積み重ねが表現者の育成へとつながっている。〈みる・演じる・ささえる〉が循環しながらようやく人形

劇の文化が根づきはじめた」と感慨深げに語る。

### 日本語教室の子どもたちが演ずる「三びきの子ぶた」

フェスタ副実行委員長の今村幸子さんは、飯田市山本小学校の常勤講師として7年間日本語教室を担当している。満蒙開拓の歴史をもつ飯田市には中国系帰国者が集住する団地があり、毎年6人ほどの中国系の子どもたちが毎日1、2時間日本語教室に通級し、国語や算数の指導を受ける。父母は多忙、祖父母が中国語しか話せない家庭の子どももおり、クラスで手を挙げて発言することが苦手な子どもたちに、今村さんは人形劇にとりくんでみようという提案をした。最初の年は団地の集会所で両親や祖父母に来てもらって上演した。耳もよく聞こえない祖母が孫の演じるのを見て喜んでくれたことが継続的なとりくみにつながった。

今村さん自身は岐阜県の市街地に育ち、Uターンの夫とともに別世界のような天竜峡の山間部の集落に転居して、しばらくは話をする相手もない時期を過ごした。家庭教育学級に参加して社会教育指導員を依頼され、「地域文化を大事にする飯田の社会教育の土壌にぽっと種がまかれて、今の私がある」と半生を振り返る。カーニバルの時代から事務局を手伝うようになり、「私のなかに人形劇がぼーんとある。人形劇を介して飯田を愛し、こんなところで子育てしたいと思ってほしい」という願いをもつようになった。

引け目を感じて自分を輝かせることができない子どもたちが、「次はいつやるの？」と人形劇を心待ちにしていることがわかり、以後6年間日本語教室として劇団「シェイシェイ」を立ち上げ、フェスタに参加するようになった。今年是中国語もとり入れてバージョンアップした「三びきの子ぶた」を上演した。街中の市庁舎サロンに子どもや大人40人ほどの観客が集まった。オオカミを操る3年生男子の落ち着いた声が響く。全員見事な日本語で感情表現も豊かだ。隣の席に中国系と思われる母親がいた。初めて観る子どもの上演だという。「自信を持って子どもは変わる」と今村さんは信じてとりくみを続けている。

「みる 演じる ささえる」人形劇のまちづくりは、子どもたち一人ひとりを育み、輝かせる地域文化となりつつある。

<写真> 山本小学校日本語教室 劇団「シェイシェイ」による「三びきの子ぶた」

(人形劇フェスタ実行委員会提供)

